2023年 3月 月刊 高校教育

教員のケーススタディが生徒を変える

「探究」を探究する 第72回

監修：田村 学（國學院大學教授）
取材・文：廣瀬志保（山梨県立高等学校教員）

2022年度から、「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）で「自分の問い、その問い直しを繰り返すこと」を丁寧に繰り返すカリキュラム開発を行う愛知県立安城東高等学校を紹介する。同校は1学年9クラス全校生徒数1072名の普通科の進学校である。

同校は国際交流の歴史が長く、普通科の中に国際理解コースを併せ持ち、オーストラリア、アメリカ、シンガポール、タイ、ドイツの高校との交流を活発に進め、世界とつながっている。

その中で、22年度からは「自らの生活基盤である地域」という視点を盛り込んだ「グローカルスタディ」（GLS）を策定し、新たな取組を始めている。1年目の22年は1年生で2回の探究プロセスを経験させ、その間に、教員による4分野の課題についてのケーススタディを行った。

総合探究「GLS」スタート

年間での授業編成を行い、オリエンテーションでは村瀬正幸校長から探究の意義やねらいに関する話と、森部慎太郎教務主任による探究の方法、具体的な進め方に関する話があった。22年度は6月から木曜の7限と夏季休業中に総合探究の時間をおいた。担当教員は学年の担任、副担任の18名。生徒には年間計画や探究の進め方を説明し、1回目の探究を夏季休業課題とした。

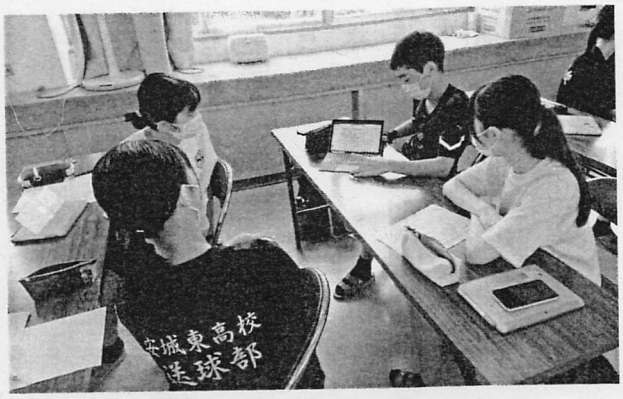
夏の探究は、テーマは自由で自分の興味・関心に沿って行わせた。フレームとして「～はどうすればよいか、なぜ～は～なのか」と設け、仮説を立て、実験やリサーチを行って結論を出していくという流れを示した。

提出された探究レポートは、生徒によって深まりにかなり差があった。先行研究にあたったり、実験をしてデータを収集したりした生徒もいる一方で、ネットの情報を引用しただけと思われる生徒もいた。

探究の発表は、「学級発表（グループ発表）→学級代表2名（9クラス18名）による学年発表」という流れで行った。グループ発表は4～5名で1グループとし、グループのメンバーを替えて2回発表させた。発表の機会を増やすことで、発表に慣れさせ、効果的な伝え方を学んでもらうことをねらった。

ケーススタディ研修

この間、教員は生徒の探究を支援しながら、同時進行でケーススタディづくりをした。ケーススタディとは、担当教科の異なる教員が3人で一つのテーマを探究し、それを基にした授業を行うものである。それにより、生徒の思考の深化や問いの重要性の再確認、グローバルとローカルの関連性の理解につなげることをねらいとした取組である。



グループで発表する生徒たち

夏季休業中に担当教員で研修会を行うとともに、教員は協働してケーススタディづくりに取り組み、生徒にどんなケースを提示するか、どのように課題を発見し、最適解をどう導くかについて互いに協議した。

分野は「生活・環境」「人権・福祉」「経済・科学技術」「多文化共生」の四つ。生徒の考えるきっかけとなり、かつ探究の「問いの立て方」や「探究の掘り下げ方」を学べるようなテーマ設定を行い、授業のたたき台を作成。その際、各3名の教員で意見を出し合い、指導案とスライドづくりをした。

10月からはケーススタディとして、8時間にわたり4テーマの授業を行った。実際に教員が探究した経験を踏まえ、「問いの見つけ方」や「探究の深め方」を、事例を通して生徒に伝えた。

「生活・環境」のケーススタディでは、ファストファッションによる環境負荷やフェアトレードの問題を通じて、「豊かな生活とは何か」について考えさせた。「人権・福祉」では、南海トラフ地震に人権や福祉の観点からどのように備えるかを、海外の避難所、核シェルターの話などを紹介しつつ考えさせた。「経済・科学技術」では、過労死を防ぐ法律が多々あるのに、どうして過労死が起きてしまうのかについて、人間心理なども踏まえつつ考えさせ、過労死予防啓発ポスターを作成させた。「多文化共生」では、ニュージーランドのモスク襲撃事件や小樽の外国人入浴拒否問題などを通して、人々が異文化を受け入れることができないのはなぜか考えさせた。

教員の探究

担当した1学年主任の関口大教諭は「『問い』づくりは教員も手探りでした。どうすれば良問を提示することができるか、生徒がより考えを深められるかについて工夫しました」と振り返る。教員のケーススタディも初めてのことであったため、先行事例を調べたり他校の実践を参考にしたりした。3名の教員がそれぞれの興味・関心に基づいて情報収集したり、資料を持ち寄ったりして、ミーティングを重ねた。ミーティングは、互いの担当教科が異なるからこそ多面的な議論が可能となった。

「経済・科学技術」で「過労死」を取り上げた関口教諭は、「担当教科が違うと、テーマに対する考え方や切り口が異なります。私は国語の教員ですが、他は数学、英語の教員でした。数学の教員は論理的に、司法や行政の側面から過労死を捉えていましたが、私や英語の教員は人間心理や教育の影響、国民性などから過労死を分析しようとしました。正直、結論は出ませんでしたが、『法整備は進んでいるが、その法を守れない、守らないような状況があるのではないか』『単純でないからこそ問題が根深く、社会問題となっているのではないか』という形で問題提起しようとまとまりました」と言う。

授業は同時に3名が他のクラスで行った。授業後に反省や生徒の反応を共有し、次に生かすようにした。

では、「過労死」について取り組んだ国語科、数学科、英語科3名の教員の実践を具体的に見ていく。SDGsの視点も取り入れ、労働者である自分たちにも身近なテーマということで「過労死」を選んだ。

ただ、実際に働いたことのない生徒にとっては興味が持てないのではと考え、導入で働くことに関する法律クイズを出題したり、英語で「過労死」はどう表現されるかといった発問をしたりした（正解は「karoshi」）。また、他の生徒の考えを共有しつつ思考が深まるよう、ロイロノートを使って意見表明をさせるようにした。最後は、タブレットで過労死予防啓発ポスターを作るという課題を出した。働いたことはなくても、過労死問題を知った今、生徒一人一人にできることはないかを考えてもらうためである。

「生活・環境」について取り組んだのは、地歴・公民科、数学科、理科の教員3名。「わたしたちの生活が周りにどう影響しているか」をテーマとして、ファストファッション、フェアトレード、Society5.0などを紹介し、「日常生活で一人一人が変えられること」があることに気づいてほしいと考えた。

理系の2人の若手教員からは、サブスクリプションや海外の交通機関などについても比較ができるという意見が出た。教科学習では、まず基礎的知識を重要視するが、総合探究では解答を与えるだけではなく、深く考えさせるようにした。そして、「どうすれば、生徒の考える常識を崩すことができるか」を念頭に授業設計をした。

長谷川沙斗子教諭は「ファストファッションは安く買える一方で、作り手の労働条件や地球環境を悪化させているという問題点を挙げました。生徒は、その解決策としてリサイクルや友人とシェアするなどと発言しがちですが、先にそれを伝えてしまい、他の解決策を考えさせるようにしました。さらに、いくら買う量を減らしても、ファストファッションを使う限り問題は解決しないのでは？　とも問いかけました」と話す。

『生徒の実践と感想』

1年生の大山虎太郎さんは「夏の探究は、自分の好きなことを嫌いだという人がいるので、その差について知りたくなった」という。大山さん自身は昆虫が好きだが、昆虫を苦手な人が身近に多かったため、その原因や差異について探究した。また、冬の探究では「自然を守るためには」をテーマにした。地域の田畑や森林の開発が進んで自然が消えている

と考え、自然を守るためには外来種の規制やゴミの減量が欠かせないと、先行研究の調査や集めたデータを基にまとめた。

「ケーススタディの授業を受けた時、取り上げているデータがしっかりしていて、その必要性を感じました。はっきりした証拠や根拠があると納得ができることが分かりました。探究をしてから、自然の鮮やかで美しい陽の部分だけではなく、陰の部分、例えば、森林の中にあるゴミなどにも目が向き、様々な変化に気付けるようになりました」と自己の変容を話した。

1年生の浅井七海さんは「どうしたら睡眠の質を上げることができるだろうか」を夏の探究テーマとした。睡眠時間を思うように取れないという自身の経験、生活課題があったためである。具体的には、自身を被験者として簡易的な実験を試みた。1日ごとに条件を変えて睡眠の質を調査。「寝る前にホットミルクを飲む」「リラックスできる音楽を聴く」など、効果的と考えられることを行って睡眠スコアを計測した結果、「寝る2時間前までにスマホの使用をやめた」ときが睡眠スコア87と最も良質であることが分かった。

「今まではそもそも就寝時間が遅く生活リズムも乱れていたのですが、実験した期間は、条件を揃えるために就寝時間と起床時間を固定したこともあって、すっきりと目覚めることができました。探究を通じて、今までの生活習慣の課題に気づくことができました。生活の改善にも役立てています」という。さらに冬の探究では、電力不足のニュースを見て不安になったことから、「節電と節水を一人一人が意識すると社会がどう変わるか」をテーマに取り組んだ。

こうした探究活動に取り組んだ浅井さんは、「ケーススタディの、広告代理店の女性社員が過労死で亡くなった話は衝撃的で、これから社会人になってどのように仕事と向き合うかを考えさせられました。今後は探究して得られた知識を自分の中にとどめるだけではなく、周りに発信することを心がけたいです。自分で問いを見つけるのは中学校ではしてこなかったので、戸惑うこともありましたが新鮮でした」と話す。

1年生の飯田野花さんも探究活動に取り組んだ。「自分で考えて、それに対して情報を集められるようになりました。また、スライドを作るときに、ケーススタディで扱われたPPTを参考にして、資料やグラフ、写真を効果的に使えるようになりました」と自身の成長を語る。

今年1月26日（木）には学年の代表生徒が、山形県立山形東高校の代表生徒と、オンラインで相互発表を行う。

関口教諭は「夏の探究によって探究の土台づくりができ、冬の探究を通して内容の深め方や、発表の仕方が上達したように思います。ただ、生徒一人一人に対するフィードバックの時間が十分に取れなかったという課題があるので、2年生では1年間をかけて一つのテーマを探究させる予定です。SDGsの視点を加えることを継続し、さらに将来の進路分野と関連させたい」としている。

教員が率先して実践するケーススタディは、生徒の学びと同時に教員の協働・探究の機会となっている。内容だけでなく、その姿勢自体が生徒に学びをもたらしているだろう。次年度からの取組が楽しみである。